『天草版平家物語』における二重否定文

播　磨　桂　子

『天草版平家物語』は、16世紀末にイエズス会宣教師によって日本語学習者のために刊行したとされる。冒頭の序文によって目的や方針が示され<注1>、当時の京(みやこ)の話し言葉を基本として用いていること、またローマ字表記により語形が確定しやすいことなどから、日本語史研究において貴重な資料である。本稿では、『天草版平家物語』の否定表現を原拠本とされる平家物語諸本と比較したうえで、特に二重否定について考察し、日本語学習書としての側面について述べたい。

Ⅰ　否定表現と文の構造

同じ事態であっても捉え方によって表現が異なる例として、しばしば次のような一対の文があげられる。

（1）もうあと5分しかない。

（2）まだあと5分もある。

上記例では、副詞「まだ／もう」や副助詞「しか／も」が発話者の捉え方を表しているが、そういった要素がない場合でも、同じ事態を表す肯定文と否定文の対において、話し手の選択はその捉え方を示すことになる。

（3）試験に受からなかった。

（4）試験に落ちた。

日本語は素材として物事を示す層（コト）を取り巻くように判断を示す層（ムード）が現れる構造を持つが、肯定・否定の捉え方がどこに位置するかが論じられてきた。

益岡隆志（2007）では、否定形式「～ない」について、命題の階層において事態の非存在を示す否定を「内部否定型」とモダリティの階層において想定される事態の否定を示す否定を「外部否定型」と称し、両者が共存するM（19）、M（20）<注2>の二重否定文の分析を挙げて、日本語ではこの類型の違いが文法形式の違いとして明確に現れると述べる。

M（19）［［事態（内部否定）］外部否定］

M（20）客がこなかった（という）わけではない。

そしてさらに、内部否定型の表現に話し手の想定を打ち消すというメタ言語的否定の側面が認められることから、否定の基本形式である内部否定型のなかにメ

タ言語的否定が萌芽的に内在していること、その部分を「のだ」「わけだ」という形式を用いて明示的に表すのが外部否定型である、と分析している。(p 45)

ここで分析の手がかりとされた二重否定文について、否定形式によって否定される部分に否定形式が含まれるものととらえると、「のだ」「わけだ」を介した形式のほかに次のような形式があげられる。

(5) 君の気持ちはわからなくもない。

(6) 知らない人はいない。

(7) 行かないといけない。

(5) は「〜なくはない・なくもない」の形で、完全に否定するのではなくある程度肯定できるという譲歩的な肯定の意を表し、 婉曲表現としての機能も持つ。(6) は「〜ない+N (体言)・〜ない」の形で、〜でないNの存在を否定する全肯定を示す。(7) は「〜ないといけない・〜なければいけない」の形で、否定形の事態を不可能・不適当を表す形式で打消すことで、当為表現となる。

これらの形式においても、命題の階層における否定とモダリティの階層における否定とに分けて捉えることも可能であるが、いったん話し手の想定を「こと」「わけ」でくくる形式と異なりメタ言語的側面は捉えにくい。

次に、否定表現「〜ない」と文の構造について、副詞の係り先の観点からみてみよう。

(8) ぜんぜん走らなかった。[ぜんぜん [走ら] ない]

(9) ゆっくり走らなかった。[[ゆっくり走ら] ない]

(10) やっぱり走らなかった。[やっぱり [走らない]]

(8) 〜 (10) 共通の述部「走らなかった」に対し、副詞「ぜんぜん」「ゆっくり」「やっぱり」は、その係り先を異にする。「ぜんぜん」は否定の要素である「ない」に係って、「走る」ことの完全否定を示す。「ゆっくり」は「走る」に係って、「ない」によって否定の認定を受ける。「やっぱり」は文全体に係り、「走らなかった」ことに対する話し手の認識を示す。

これらにさらに否定を加えた二重否定の文では、外側の否定との関わりにも違いが見られるようである。

(11) ぜんぜん走らなかったのではない。[[ぜんぜん [走ら] ない] の・ではない] (≠全く走った/≒少しは走った。)

(12) ゆっくり走らなかったのではない。[[[ゆっくり走ら] ない] の・ではない] (≠速く走った/≒ゆっくり走った。)

否定の否定は肯定になるが、(11) と (12) とでは加わった否定の焦点が異なる。(11) では、「ぜんぜん〜ない」すなわち完全否定を否定するため、「少しは走った」の意の部分否定となる。(12) では、「ゆっくり走る」の否定を否定するため、「ゆっくり走った」ことを表す文意になる。

(10) については、「のではない」を付加すると不自然な文 (13) になる。「や

っぱり」のような話し手の認め方を表す要素は否定できないためであり、(14)のように「のではない」の外側に「のだ（んだ)」を加えて「やっぱり」を否定の焦点から外すと可能な文になる。「やっぱり」はある事態に対する話し手の捉え方を示し、判断を示す層の中でも外側に属するもので、その判断自体を否定できない。

(13) ？やっぱり走らなかったのではない。[やっぱり [[走ら] なかった] の・ではない]

(14) やっぱり走らなかったのではないんだね。[やっぱり [[[走ら] なかった] の・ではない] んだ] ね]

先にあげた（5）（6）（7）の二重否定文の場合はどうだろうか。述語の動詞に「走る」を入れて検討してみる。

(15) ぜんぜん走らなくもない。[[ぜんぜん [走ら] なく] も・ない]

(16) ぜんぜん走らない人はいない。[[ぜんぜん [走ら] ない] 人は・いない]

(17) ？ぜんぜん走らないといけない。[[ぜんぜん [走ら] ない] と・いけない]

(18) ゆっくり走らなくもない。[[[ゆっくり走ら] なく] も・ない]

(19) ゆっくり走らない人はいない。[[[ゆっくり走ら] ない] 人は・いない]

(20) ゆっくり走らないといけない。[[[ゆっくり走ら] ない] と・いけない]

(21) やっぱり走らなくもない。[やっぱり [[走ら] なく] も・ない] ？

(22) やっぱり走らない人はいない。[やっぱり [[[走ら] ない] 人は・いない]]]

(23) やっぱり走らないといけない。 [やっぱり [[[走ら] ない] と・いけない]]

「ゆっくり」の係り先に関しては動詞「走る」であるため、形式の違いによる影響はない。「ぜんぜん」については (17) が不自然な文となる。「ぜんぜん」が否定の要素と呼応することからすると、「～ないといけない」の形式はひとまとまりで肯定相当となっていることがうかがえる。「やっぱり」については (21) で可否の判断にゆれが生ずると思われるが、(13) ほどの不自然さは感じられない。否定が判断の対象となる素材の中に含まれるかどうか、二重否定文の形式それぞれのメタ言語的側面の捉えやすさの差異によるものと思われる。

肯定と否定の対立が捉え方の層に属するという面を持つ一方、述語の肯定形が事態を示す層に現れるのと同様に、否定形も事態を示す層に属する面を持ちうる。

(24) (25) の「全然」は係り先に否定の要素を取るが、必ずしも「～ない」の

ような打消しの語でなく、「だめだ」のように否定的な意味を持つ語であれば肯定形でも係り先になる。形の上で肯定でも係り先となりうることから、(26) のような肯定表現での用法へも移行していくと考えられるが、(26) は何の前提もなく使用することはできない。前提として「つまらない」ことが予期されており (26) がその否定となる場合、もしくは「AよりBのほうが全然おもしろい」という比較の構文で、AとBについて予期された評価の否定となる場合など、何らかの否定の要素を含む必要がある。

(24) 全然おもしろくない。

(25) 全然だめだ。

(26) 全然おもしろい。

二重否定に現れる副詞の係り先の違いは、しばしば次のような文の解釈のゆれを生じる。

(27) この経験は彼にとって全然新しいものではなかった。(夏目漱石『明暗』)

(28) 嘘を云う積でもなかった津田は、全然本当を云っているのでもないといふ事に気がついた。(『明暗』)

上記二例は、「全然」が「否定と呼応する」という今日の規範意識をもってみると、

(29) [全然 [新しいもので] は・なかった]

(30) [全然 [[本当を云っている] の・で] は・ない]

のように完全否定の意で解釈しがちであるが、文意から解釈すれば

(31) [[[全然新しい] もの・で] は・なかった]

(32) [[[全然本当を云っている] の・で] も・ない]

すなわち部分否定である。

Ⅱ　資料について

『天草版平家物語』は 1592 年にイエズス会により天草学林で刊行され、現版本は『エソポのファブラス』『金句集』と合冊で大英図書館に一本のみ存する。その序文には、刊行の目的や方針が述べられており、「他国のことばを学ばんとする初心の人のため」外国語の学習者に対するさまざまな配慮を施したものとして、「世話に　やわらげたる」「書物のごとくにせず、両人相対して雑談をなすがごとく、ことばのてにはを書写」の記述のとおり、平家物語を当時の話しことばに訳し、問答形式を用いた文体をとっている。また、「力の及ぶところは本書のことばを違えず書写し、抜書となしたるものなり」とあることから原拠本とした平家物語の「ことば」をできるだけ忠実に写した抄録であることがうかがえる。

この原拠本そのものは未確認であるが、「平家物語」諸本との本文比較の諸研究により、近い本文を持つ本が示されている。これらの成果を参考に、本稿では『天草版平家物語』の巻一および巻二の一章を覚一本系統龍谷大学本を底本と

する日本古典文学大系『平家物語』、巻二の二章から巻三の八章と巻四の二章から二十八章を斯道文庫本『百二十句本平家物語』、巻三の九章から巻四の一章を『天理図書館善本叢書　平家物語　竹柏園本』を原拠本に近いものとして比較に用いることとする。

また、先行研究で示された天草版内部での語彙・語法や表記の差異に基づく区分については、清瀬（1956）、同（1968）、同（1973）などによる巻Ⅳの第二章を境目とする二分説、小池（1973）による巻Ⅰ・巻Ⅱ巻頭、巻Ⅱ・Ⅲ、巻Ⅳの三分説を対照に用いた<注3>

Ⅲ　『天草版平家物語』における二重否定文の分布

『天草版平家物語』の否定表現については、細川（1979）・細川（1980）に表現形式と用法全般を取り上げた研究があり、江口（1994）にも否定の助動詞について詳細な分析がなされている。個別の形式を対象とした研究は多くあるが、本稿で取り上げる事象と関連するものとして、打消意志・打消推量の助動詞「じ」「まじ」「まじい」「まい」の使用状況と分布を調査し、用語使用の差異に基づく区分の先行説と対照して、『天草版平家物語』の資料性について論じた矢島（1993）があげられる。

本稿では「ない」「ず」など否定の文法形式を含む要素がさらに否定される二重否定文を取り上げ、巻ごとの分布や用法の分類を観察する。

<表1>

平家物語の巻序	天草版平家物語				対比に用いたテキスト	引用形式	副詞添加	口訳語存立	起点		二重否定	
	巻序	章	ページ	ページ分量							一致	添加
1	Ⅰ	1～3	3～	17	覚一本	いわれたれば	あり	～ほど・ている・ばかり・ぢやある等・ほどに等	より	サライム	1	4
2		3～9	20～	50							5	4
3		10～12	70～	23							0	0
1	Ⅱ	1	93～	14	百二十句本				から	サブライ	0	0
4		2～8	107～	36							1	0
5		9～10	143～	13							1	2
6	Ⅲ	1	156～	3							0	0
7		2～8	159～	37							0	1
8		9～13	196～	29	竹柏園本						0	0
8	Ⅳ	1	225～	3						サムライ	0	1
9		2～10	228～	56	百二十句本	仰せられば	なし	～ばいたう			3	0
10		10～15	284～	40							2	0
11		16～20	324～	36							1	0
12		21～28	360～	38							0	0

表1は、『天草版平家物語』内部の巻および章ごとに、対応する「平家物語」の巻と比較に用いたテキスト、先にあげた先行研究の語彙・語法の現れ方による区分、二重否定の出現数を示したものである。原拠本に近い本文をもつテキストと対比して、双方とも二重否定を用いている例を「一致」、『天草版平家物語』にのみ二重否定が用いられている例を「添加」として挙げた。二重否定の使用数自体31例と多くはないが、対比テキストになく、天草版平家で二重否定を用いる

例が巻Ⅰに集中していることが注目される。また巻Ⅳの二章以降において用いられる二重否定文がすべて対比テキストと一致することも、先行研究において指摘される巻ごとの性質を反映するかと思われ興味深い。

ここにみた二重否定文の対応の分布が、偶然によるものではないと位置付けるとすれば、どのように考えられるだろうか。検討するにあたって、『天草版平家物語』で使用されている二重否定文をⅡにあげた現代語の二重否定文の形式と同様に、意味用法にもとづいて次のA、B、Cに分類する。なお、以下『天草版平家物語』の本文引用につき「天草版平家」、対照に用いた古典平家物語を「原平家」と記す。

A　当為表現　〜で・〜いで＋（は）＋かなわぬ（ない）・ならぬ等

（天1：008/11)）罪科　に　行わせられいで　わ　かなわぬ　儀　ぢゃ　ほどに

現代語の「〜なくてはならない」「〜ないといけない」に相当し、「べきだ」「はずだ」に類する当為表現となる。

B　全肯定・強い肯定　〜しない（せぬ）N・〜でないN＋ぬ・ない

（天1：058/03）その　座　に　並み　いた　ほど　の　人　は，心　ある　も，心　ない　も　みな　袖　を　ぬらさぬ　わ　なかった　と，申す．

「袖をぬらさない人」の存在を否定することで、その座の「全ての人が袖をぬらした」ことを表現する。強い肯定、全肯定の意味となる。

C　譲歩的肯定・婉曲表現　〜ない・〜しないで＋（は・も）＋打消し

（天1：046/12）その　うえ　君　の　思し召し　たつ　ところ　道理なかば　ないで　わ　ご　ざない．

上の例は平重盛が父清盛を諫め、平氏を討とうとした法王の行動に道理があることを述べる発言で、控えめな肯定を表す。現代語で「〜なくはない」「〜なくもない」のように「は」「も」を伴うことが多く、部分的な肯定や婉曲な表現として用いる。

天草版平家における二重否定文の添加の例と、原平家との一致の例に上記の用法分類をあてるとそれぞれ次の数となる。

＜天草版のみ二重否定を用いる例（添加）＞ A 9例　B 4例

＜二重否定の使用が対応する例（一致）＞　A 2例　B 12例　C 2例

天草版平家に二重否定が見られ、原平家には別の表現が用いられている例を(33)〜(44)に挙げる[注4]。そのうち、(33)〜(41)は上記分類A、(42)〜(44)はBである。

(33)では「みな」、(34)では「つねの」の語句で表現される慣例や規則が、二重否定による表現に対応する。

(33)その　子細　わ　忽別　剣　を　帯して　座敷　に　つらなり，兵仗　を

たづさえて　内裏　え　出で　入り　を　する　こと　わ　別して　の　子細　が　なうて　わ　ない　こと　ぢゃ　に：(天1：008/05)

夫（それ）雄剱を帯して公宴に列し、兵仗を給て宮中を出入するは、みな格式の例をまもる。綸命よしある先規なり。(覚：1)

(34) まことに なにたる 威勢 位 の ある 人 を も 蔭 では いたづらもの わ　そしらいで　かなわぬ　もの　なれ　ども（天1：11/21)

又いかなる賢王賢主の御政も、摂政関白の御成敗も、世にあまされたるいたづら者などの、人のきかぬ所にて、なにとなうそしり傾け申事はつねの習なれども（覚：1)

(35) では、「～がたし」という否定的意味を持つ肯定形述語が二重否定に対応する。

(35) 罪科　に　行わせられいで　わ　かなわぬ　儀　ぢゃ　ほど　に（天1：008/11)

事既に重畳せり、罪科尤のがれがたし。(覚：1)

(36)、(37) は「べし」を用いた肯定文に二重否定が置き換えられている。

(36) 官位　をも　はがせられいで　わ　かなうまじい　と　まっくろ　に　うったえられた.（天1：008/12)

早く御札をけづ（っ）て、闕官停任ぜらるべき」由（覚：1)

(37) 總別　宣旨　を　下されて　戰場　え　向かう　大將（たいしゃう）は，みっつ　の　事　を　心得られいで　叶はぬ。(天2：148/0)

宣旨ヲ奉テ戦場へ向フ代将軍ハ三ノ存知アルヘシ・(百5)

(38) ～ (40) の三対では「などか～べき」の反語が対応しており、形式の上では二重否定ではないが、意味的に二重否定と同様の構造を持つ文と形式として二重に否定の要素を持つ文との対応である。

(38) 畠山　の　一族　など　わ，こなた　え　参らいで　かなうまい：(天2：151/03)

畠山ノ一族・大庭カ兄弟ナンドカ参ラテ候ヘキ（百5)

(39) 都の内になさけをかけまらするものがなうてはかなふまじい。(天3：184/14)

情ケヲ懸ケ参ン人都ノ内ニナトカ無カルヘキト言ヘハ（百7)

(40) 一方（いっぱう）　の　をん　固め　に　なり　たてまつらぬ　こと　わ　ござるまい.（天1：039/13)

一方の御固にはなどかならで候べき。(覚2)

(41) 判官に　おいては　勅勘　なさせられいで　かなわぬ：(天8：226/07)

朝康ニ於ハ既ニ違勘者ニテ候（竹8)

(42) ～ (44) の三例はBの全肯定であるが、すべて巻Ⅰの例であり対応する覚一本では「みな袖をぞぬらしける」という類似した文である。

(42) その座に並み居られたるほどの人々心あるも、心ないもみな袖をぬらされぬはござなかった。(天1：048/24)
一門の人々、心あるも心なきも、みな の袖をそぬらされける。(覚2)
(43) 猛い もののふ ども も みな 袖 を しぼらぬ もの わ なかった. (天1：054/22)
たけきもののふ共もみな袖をぞぬらしける。(覚2)
(44) その 座 に 並み いた ほど の 人 は, 心 ある も, 心 ないも みな 袖 を ぬらさぬ わ なかった と, 申す. (天1：058/03)
其座になみゐたる人々、心あるも心なきも、皆袖をぞぬらしける。(覚2)

次に、天草版平家と原平家の二重否定の使用が対応する例について述べる。Aの例は(45)(46)の二例である。この対では、原平家の打消し助詞「で」に「いで」が対応し、打消しの助動詞「まじ」に「まい」「まじい」が対応する。

(45) この こと と 思い 知らせ 奉らいで わ おくまい：(天1：015/20)
此事おもひしらせたてまつらでは、えこそあるまじけれ。(覚：1)
(46) 大將軍 いちにん ましまさいでは かなうまじい 由を 申す. (天4：256/21)
≪大将軍一人マシマサデハ叶マシキ由ヲ申ス≫(百9)

原平家と二重否定の使用が対応する中では、Bが12例と最も多い。原平家の該当箇所と並べてあげ対照してみると、(48)の「流されぬ」「なかった」と「流さぬ」「なかりけり」、(49)の「あらず」「ござない」と「あらず」「なし」のように、否定の要素がほぼ忠実に一致する。(51)は、(42)～(44)と同内容の文で原平家に二重否定構文を持つ例である。

(47) たが 漏らいたか, さだめて 北面 の もの ども が なか に あらうず と 思わぬ こと なう 案じ 続けて おじゃった ところに, (天1：027/14)
誰もらしつらむ。定て北面の者共が中にこそ有らむ」など、思はじ事なう案じつづけておはしけるに、(覚：2)
(48) 院中 の 人々 少将 の袖 を ひかえ, 袂 に すがって, 名残 を 惜しみ, 涙 を 流されぬ わ なかった. (天1：036/20)
院中の人々、少将の袖をひかへ、袂にすが(っ)て名残をおしみ、涙をながさぬはなかりけり。(覚2)
(49) 普天 の 下 王土 に あらず と ゆう こと わ ござない：(天1：045/22)
普天の下王地にあらずといふ事なし。(覚2)
(50) 清盛 の あわれまれた うえ は 京中 の 上下 老いたも, 若い

も 鬼界が 島 の 流人 の 歌 と ゆうて，口ずさまぬ わ ござなかった と 申す．(天1：068/02)
入道相国のあはれみたまふうへは、京中の上下、老たるもわかきも、鬼界が嶋の流人の歌とて、口ずさまぬはなかりけり。(覚2)

(51) 袖 を 絞られぬ わ ござなかつた．(天2：138/18)
申ニ及ハス女官ドモ局々ノ女童ニ至ルマテモ涙ヲ流シ・袖ヲ絞ヌハナシ（百4)

(52) 坂東 には なびかぬ 草 木 も あるまいと，(天2：151/04)
是等タニモマイリナハ・坂東ニ靡ヌ草木モ候マシト（百5)

(53) しかしながら 君 の 御恩 で ない と 申す 事 わ ない．(天3：194/20)
併ラ君ノ御恩ニ非スト云コトナシ（百7)

(54) すべて 目 に 見，耳 に ふるる こと の 一つ と して あわれ を 催し，心 を いたましめぬ と ゆう こと わ ござなかった．(天3：195/20)
惣ヘテ目ニ見耳ニ触ルヽコトノートシテ哀ヲ催シ心ヲ傷マシメスト云コトナシ（百7)

(55) これを みて 惜まぬ 人わ なかつた．(天4：250/15)
是ヲ見テ惜マヌ人コソ無リケレ（百9)

(56) 組むほどならば、人見が落ち合せて力を合せぬことわあるまいと思うて(天4：275/6)
組ホトニテ人見落合テ力ヲ合ンコアラシト思テ（百9）<注5>

(57) 見る 人 聞く者，涙を 流さぬわ なかったと，申す．(天4：277/24)
見ル人聞物涙ヲナカサヌハナカリケリ（百9)

(58) いづれも 晴れで ないと ゆうことわ なかった．(天4：337/03)
何レモ晴ナラスト云コトナシ・(百11)

(59)、(60) は、二重否定により「ないわけではない」「ないことはない」と控えめな肯定を表す。

(59) さぶらい ほど の もの の 受領 検非違使 に なる こと ため し ない こで わ ない：(天1：026/23)
侍品の者の受領検非違使になる事、先例傍例なきにあらず。(覚：2)

(60) その うえ 君 の 思し召し たつ ところ 道理なかば ないで わ ご ざない．(天1：046/12)
然ば君のおぼしめし立ところ道理なかばなきにあらず。(覚2)

その他、(61) は原平家にB用法の二重否定が使用されていて全肯定を示すが、天草版平家では「しかしながら」を用いて全肯定を表わしている例である。

(61) その 故 わ，重盛 いま 大臣 の 大将(だいしゃう) に いたる まで しかしながら 君 の 御恩 で ござる。その 恩 の 重い こと を 思えば，千顆 万顆 の 玉にも こえ，(天1：047/08)
其故は、重盛叙爵より今大臣の大将にいたるまで、しかしながら君の御恩ならずと云事なし。其恩の重き事をおもへば、千顆万顆の玉にもこえ、(覚2)

天草版平家に用いられている二重否定の分布をみると、添加された例は巻Ⅰの前半に集中し、Aの当為表現の例が多い。一方巻Ⅳの2章以降は原拠本に近いものとして対比に用いたテキストの二重否定にすべて対応する。巻Ⅳ2章以降の区分については、清瀬（1968）清瀬（1973）などの二分説、矢島（1993）で明らかにされた「まじい」の分布および原拠本との対応に一致するかと思われる。

天草版平家の日本語学習書としての観点から考えてみると、否定文は肯定文に比べると有標であり、否定表現のなかでも否定疑問や二重否定は習得が難しいものである。しかし、巻Ⅰ前半に用いられるAの形式はⅡでみた現代語の「～なくてはならない」「～なければならない」と同様に、否定を否定するという側面が薄れ、ひとまとまりで肯定の当為表現相当になっているのではないだろうか。天草版平家と同時期の同じくイエズス会により刊行された日本語文法書『ロドリゲス大文典』には（62）（63）の記述があり、「極めて上品に一つの肯定をつくる」形式として挙げられている。そうすると日本語学習書である天草版平家のはじめの方に、優先的に習得すべき形式として意図的に用いられたと考えてもよさそうである。

(62)「拉丁語に於けると同様に、この国に於いても、二つの否定は一つの肯定となる。例えば、Aguenu coto arumai.（上げぬ事あるまい。）これは Agueo（上げう）の意。Agueide canauanu.（上げいでかなはぬ。）Aguezumba aru becarazu.（上げずんばあるべからず。）Aguezu xite canawanu.（上げずしてかなはぬ。）Agueideuano coto:（上げいではの事。）Agueideuato zozuru.（上げいではと存ずる。）Quicaxerareideuato zonnzore domo,&c.（聞かせられいではとぞんずれども、云々。）お聞きにならずには居られないと思はれるといふ意である。」
（土井忠生訳『ロドリゲス日本大文典』第一巻、p113）

(63)「色々な時や法に立つ二つの否定は極めて上品に一つの肯定をつくる。例えば、Agueide canauanu.（上げいでかなはぬ。）上げざるを得ないの意。Aguenucoto arumai.（上げぬことあるまい。）agueo（上げう）の意。Aguezumba aru becarazu.（上げずんばあるべからず。）Aguezide canawanu.（上げいでかなはぬ。）と同意。Agueide modorumai.（上げいではの事。）

Aguete modorou.（上げて戻らう。）の意。」
（同上書第二巻、p326-327、「時および法を同じうして連続する否定句」附則三）

天草版平家と合綴されている『エソポのハブラス』、同時代の資料として『大蔵虎明本狂言集』からも使用例を挙げておく。

(64) 少しの　力と，ひま　ある　とき，なぐさみ　を　ことと　しょう　者は，必ず　のちに難を　受けいでわ　かなうまい.（エソポのハブラス、蝉と蟻との事、466・2）

(65) あの　犬めが　鳴く　声を　きけば，　胸　うちさわいで　逃げいでわかなわぬ　とぞ.（エソポのハブラス、鹿と子の事、493・24）

(67) るすなどゝいふものは、ようじんもせひでかなはぬに、このやうにしておかれては、たとへぬす人がいつたといふても何共なるまひ。（大蔵虎明本狂言集、ばうしばり）

(68) 汝が云も尤なれ共、さりながらおぬしは事の外力もつよし、その上ひやうほうなどがよひ程に、たばからずはなるまひと、（大蔵虎明本狂言集、ぶあく）

Ⅳ　まとめ

前章で述べたとおり、天草版平家に使用されている二重否定文の分布において、原平家にない二重否定の添加例は巻Ⅰに集中し、中でもひとまとまりの当為表現となっている礼が多い。二重否定の全例数自体がさほど多くないため偶然の可能性も否めないが、先行研究によって示された資料内部の語彙・語法の差異と併せて考察すると、二重否定により「きわめて上品に一つの形をつくる」慣用化した当為表現形式を意図的に添加して使用したと考えてもよいのではないだろうか。

これからの課題として、田中（2003）等に示されている通り、近世から近代にかけて「～ナイデハ（ネエデハ・ネエジャア）／～ナイ・ヌ（ン）・マセン・マイ」のような二重否定が様々な形式を発達させていることなどと史的推移に関する位置づけも考えてみたい。

<注>

<注１>該当箇所の原文は次の通りである。

‘NIFONNO COTOBATO Historia uo narai xi ran to FOSSVRV FITO NO TAME-NI XEVA NI YAVARAGVETARV FEIQE NO MONOGATARI.
IESVSV NO COMPANHIA NO collegio Amacu

sa ni voite Superiores no go menqio to xite core uo fan ni qizamu mono nari. Go xuxxe yori M. D. L. XXXXII.'

<注２>益岡（2007）による例文の引用を、番号にMを付して記す。

<注３>各論考につき、私に要点をまとめて挙げる。

清瀬（1956・3）

会話引用の形式として「…といふ」の尊敬の言い方である「仰せらるる」「いはるる」「ある」の三分野の分布を調査し、平家巻９を境に前半で「いはるる」後半で「仰せらるる」といった分布の偏りが見られることを述べる。

清瀬（1968・9）

天草版平家物語と古典平家物語（巻１－３古典文学大系本・覚一本、巻４－12斯道文庫蔵百二十句本、巻８竹柏園本）の比較により、平家巻１－８にあたる前半（「ほど・ばかり」「ている・てある・ておく・てのくる・てござる」「ぢゃによって・ぢゃほどに」）と巻９－12にあたる後半（「ばや」「といへども」「給ふ・おはす」「ぬ」「いたう」「さるほどに」）で、口訳語の存立状態に相違があることを述べる。

清瀬（1973・3）

天草版平家、古典平家両本文を対比し、古典平家にない副詞の添加（異なり語数24）が天草版平家前半（ｐ３～ｐ228）に偏ることを述べる。

小池（1973・3）

天草版平家物語の日本語教科書としての目的から、同義語の意図的な言い換えが行われていることを指摘し、「教本的換言法」とする。また、「サブライ」「サムライ」２語形の分布や開合・四つ仮名表記の乱れ、それに教本的換言法の分布から、巻Ⅰ・巻Ⅱ巻頭、巻Ⅱ・Ⅲ、巻Ⅳの三分説を提唱する。

小池（1975）

天草版平家における助詞「より」「から」の分布を原拠本との比較によって検証し、前半が話しことば的要素が強いとする二分説に矛盾する事実を提示、複数の口訳者が存する可能性を挙げる。

<注４>

用例の引用にあたっては、例えば『天草版平家物語』第Ⅰ章８ページ５行目を（天1：008/05）、覚一本平家物語巻一を（覚1）のように略記する。

<注５>

（56）斯道文庫蔵本では、「力ヲ合ンヿアラシ」すなわち「力を合せるようなことはあるまい」と読めるが、覚一本「あれがちがづいたらん時に、越中前司にくんだらば、さり共おちあはんずらんと思ひて待つところに、一段ばかり近づいたり。（覚：9）」、竹柏園本「アレカ近付タラン時越中前司ニ組タラハ人見落合ント思テ待所ニ一段討ニ近付タリ（竹：九35オ）」、平松家本「阿礼カ近付タラム時ニ越中ノ前司ニ組タラハ左有トモ落合ト覚者ヲト思ヒテ待所ニ一段計近付タリ（平松本：九41ウ）」となっている。天草版平家の「力を合わせぬことはあるまい」は「力ヲ合ヌヿアラジ」からの訳と取る方が妥当と思われ、二重否定をそのまま置き換えた例とした。

<引用文献・参考文献>
江口正弘（1994）『天草版平家物語の語彙と語法』笠間書院
清瀬良一（1956・3）「天草版平家物語における会話引用の言いかたについて」『國文學攷』16号
清瀬良一（1968・9）「天草版平家物語における口訳語の存立状態」『国語学』75
清瀬良一（1973・3）「副詞から見た天草版平家物語本文の特色」『國文學』61号
清瀬良一（1982・12）『天草版平家物語の基礎的研究』、渓水社
小池清治（1973・3）「天草本平家物語における教本的換言法について＝清瀬説への疑問＝」、『フェリス女学院大学紀要』第8号
小池清治（1975）「キリシタン版天草本『平家物語』の用語に関する一問題―口訳者は複数か―」『佐伯梅友博士喜寿記念　国語学論集』表現社
小林賢次（1969）「否定表現の変遷―「あらず」から「なし」への交代現象について―」『国語学』75
小林賢次（1977）「「ベシトモ覚エズ」考」『香川大学国分文研究』第2号
小林賢次（2010・6）「室町時代における否定推量・否定意志の表現」『否定と言語理論』開拓社
近藤政美（2008）『天草版『平家物語』の原拠本、および語彙・語法の研究』、和泉書院
菅原範夫（1989・3）「キリシタン版ローマ字資料の表記と読み―ローマ字翻字者との関係から―」『国語学』156集
田中章夫（2003）「否定条件の先行する二重否定形の動向―江戸語資料を中心として―」『国語と国文学』特集号「近代語」
塚原鉄雄（1976・1991）「部分否定と全面否定―土佐日記の「かならずしも」を契機として―」『国語副詞の史的研究』新典社、1991（初出『高野山大学国語国文』第三号、1976）
細川英雄（1979・11）「『天草版平家物語』における否定の表現　形式と用法について（上）」『信州大学教育学部紀要』41
細川英雄（1980・3）「『天草版平家物語』における否定の表現　形式と用法について（下）」『信州大学教育学部紀要』42
矢島正浩（1993・2）「天草版平家物語における打消推量・打消意志の助動詞―資料性との関わりを中心として―」『愛知教育大学研究報告　42』
山口堯二（2000・3a）「中世末期口語のおける「べし」の後身―『天草版平家物語』の訳語による―」『文学部論集』第84号
山口堯二（2000・3b）「『天草版平家物語』の「まじい」と「まい」－原文との対象から見た打消推量の助動詞統合の歩み―」『京都語文』5号
山口堯二（2001・3）「「まい」の通時的変化」『文学部論集』第85号

<資料として使用したテキスト>
江口正弘『天草版平家物語　対照本文及び総索引　本文篇』明治書院、1986
日本古典文学大系『平家物語』岩波書店、1959
慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編『百二十句本平家物語』汲古書院、1970

天理善本叢書『平家物語　竹柏園本』八木書店、1978
土井忠生訳『ロドリゲス日本大文典』三省堂、1995
大塚光信・来田隆編『エソポのハブラス　本文と総索引』清文堂出版、1999
池田廣司・北原保雄『大蔵虎明本狂言集の研究　本文篇』表現社、1973